

【07】「支援者の“常識”“非常識”を超えて ～音楽療法士のためのリベラル・アーツ的思考～」

【講師】北脇 歩

【要旨】

支援者は学び続ける必要がある。それは単に新しい情報を得るという意味だけではなく、「支援者であり続けたい」と願う私たち自身が、「なぜそう願うのか」「どうすればそうあり続けられるのか」と問い続けることを意味している。

対人支援では、対象者にとって何が真実であり、何が本当の支援となるのかを、多角的な視点と広い視野で捉え、彼らとの生きた関わりの中で、彼らから学び取ることが求められる。ひとつの視点から得た情報を鵜呑みにし、思考が偏り固定化してしまうと、支援者自身の想像力や創造性は停滞し、支援そのものが成立しないかもしれない。

私たちが出会う対象者は、地域や国籍、時代や環境など異なる文化的背景を持ち、それぞれ多様な価値観で物事を捉えている。そして、その価値観も日々変化する。私たちが「彼らについて実は何も知らない」「彼らにとっての正解を支援者が決めることはできない」と受け入れることは、支援の第一歩となる。専門家として前進するためには、常識とされていることの裏にある非常識、また非常識とされていることの中にある常識を見極める必要がある。そして、対象者にとって最善の支援にたどり着くためには、「柔軟な思考力」を養うことが必要となる。その思考を支えるのがリベラル・アーツである。

リベラル・アーツとは、単に「幅広い分野における学び」を意味するのではなく、「答えのない課題に対してどう向き合うかを問い続けることへの学び」を意味する。不確実性の中で、固定観念から自分を解放し、目の前の課題に対して何が求められているのかを問い直し、そのための新しい思考方法を獲得する学びである。対象者が抱える複雑な課題に対して問いを立て、自由に柔軟な発想や視点を持つことは、これまでに得た情報を単なる知識にとどめず、対人支援における新たな知恵や気づきに変える原動力となっていくだろう。特定の理論や技法にとどまらず、様々な分野に触れ、それらを横断的に学び、つなぎ、新たに構造化していくことで、支援における価値創造の視野は広がるのではないだろうか。

音楽療法が幅広い対象領域で活用される今、リベラル・アーツの視点を通じて、目の前の対象者が何に困り、何を素晴らしいと感じ、何に幸せを見出すのか、そして彼らにとって大切な価値を創造するために私たちはどうあるべきか。音楽療法における支援の在り方や姿勢について、共に考える機会としたい。

【プロフィール】

同志社女子大学学芸学部音楽学科准教授。Master of Music in Music Therapy, Michigan State University。米国にて、ホスピス緩和ケア音楽療法士として患者と家族への臨床を实践。また音楽療法インターンシップスーパーバイザーとしても従事。現在、音楽療法士の養成に加え、難病や終末期の患者と家族の支援、看取りを行う高齢者施設での音楽療法士卒後教育に携わる。米国認定音楽療法士(MT-BC)、日本音楽療法学会認定音楽療法士。